2012年（平成24年）
第51号
（3月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

祈り、願い、希望をチカラにかえて　～東日本大震災から一年「こころ ひとつに」～

あれから一年。全国各地で犠牲者への慰霊と復興への祈願が行われる。佼成会も本部や教会で式典を実施し、心のケアに重点を置いた復興支援を進めていく。

■全国で慰霊法要を実施

3月11日、東日本大震災犠牲者慰霊・復興祈願が大聖堂をはじめ全国の教会で行われた。大聖堂での式典の模様が衛星放送で全国に中継された。

京都教会での様子

全国の青年部員たちが書き上げた犠牲者の名前を読み上げての慰霊供養が行われ、会員代表の体験説法のあと、庭野日鑛会長が「今日、皆さまと復興祈願ができた事はありがたいこと。教団として皆さまと支援を進めていきたい」と、復興支援に向けてさらに取り組もうと呼びかけた。

■大聖堂にて写真展を開催

3月1日から来年2月まで大聖堂にて、「こころ ひとつに」プロジェクトの一環として、復興に向けて立ち上がる人々のたくましさなどが見られる写真展を開催している。

■ＷＣＲＰ震災復興キャンペーン2012

「ＷＣＲＰ震災復興キャンペーン２０１２」に本会も参画。同キャンペーンは、『「東日本大震災をけっして忘れない」ための祈りと行動』をテーマに、「失われたいのち」への追悼と鎮魂、「今を生きるいのち」への連帯、「これからのいのち」への責任――の三つを方針に掲げている。

京都教会では、①3月21日の「東日本大震災の追悼と鎮魂ならびに復興合同祈願式」②3月11日から21日までの「１４：４６の１分間黙とう」③4月8日に教会内で実施する「復興支援募金」に参画する。

■新宗連京都・青年部が学習会と復興の祈りを実施

新宗連京都府協議会青年部は、「東日本大震災復興への祈り」として、2月18日に京都教会にて学習会を、3月10日に解脱会関西道場にて慰霊法要を実施した。

学習会には、加盟団体の青年25名が参加し、本会近畿支教区青年教務員の堂前氏から被災地へのボランティアの体験を現地の映像を放映しながらの講演があった。

3月10日の復興の祈りでは、折鶴奉納、教団別復興の祈りがあり、それぞれの教団の形式で祈りを捧げた。協議会青年部長は「宗教の違いはあれど幸せになりたい、人の役に立ちたいという願いは同じである」と述べ、３月第２土曜日を平和の祈りの日としたいと表明した。式典後は泉涌寺へ移動し、本殿、霊明殿を参拝した。

お知らせ（４月の教会行事）

４月	１日（日）	朔日参り・布薩の日	９：00～
	４日（水）	開祖さまご命日	（各支部）
	８日（日）	降誕会・花まつり	９：00～
	１０日（火）	脇祖さまご命日	９：00～
	１５日（日）	釈迦牟尼仏ご命日	９：00～

時事刻々

なでしこジャパンの活躍に日本中が湧きたった。サッカー女子の国際大会、アルガルベ・カップで準優勝した▼今大会で世界ランク1位の米国に初めて勝利した。同2位のドイツには先行されたが、二度も追いつくことができたが、ロスタイムで勝利を逃した▼最後の最後まであきらめずに戦う姿勢に多くの人は勇気をもらった。辛抱強さは日本人の徳目と言われている▼大震災に見舞われた東日本の人々の辛抱強さには感服する。しかし、一年たってもなかなか復興できず、その辛抱も限界にきているのではと、心配になる▼遠く離れていると、日々の生活に追われ、被災地のことは忘れがちになる。復興まで何年もかかると言われており、息の長い支援が求められている▼日本人は熱しやすく冷めやすいとも言われている。なでしこジャパンが常に前を向いて、練習し、結果を出してきた。震災復興の支援もこうありたい。

第29回庭野平和賞受賞者を発表

2月29日、京都教会において宗教記者会に対し、第29回庭野平和賞の発表が行われた。コナビグア（CONAVIGUA－連れあいを奪われた女性たちの会）共同設立者で2010年までその代表をつとめ、現在は財務部門を担当しているグアテマラ共和国のロサリーナ・トゥユク・ベラスケス氏に贈ることを発表された。

同氏は1956年、グアテマラ共和国のチマルテナンゴ県で、マヤ・カクチケル部族の典型的な農民の家庭に生まれ、15歳で農村女性の識字教育を行うキリスト教青年グループに参加し、23歳で准看護士の資格を取得。1960年に発生した内戦で、1980年代に父親と夫を失い、他の女性たちと民衆運動に加わるようになり、1988年にコナビグアの設立に参加。内戦終結後は内戦被害に対する補償の要求、女性の政治参加、先住民族の権利保護など多くの課題に取り組んでいる。

厳粛・盛大に　創立７４周年記念式典

教団創立７４周年記念式典が3月5日、大聖堂および各教会で行われた。大聖堂の式典には、会員約4,000人が参集。法話に立った庭野日鑛会長は、「人を救い、世を立て直す」という立正佼成会創立の意義をかみしめるとともに、広い視野に立ち、世界の諸課題の解決に向けてあらゆる人々と手を携え、共に救われる道を歩んでいく重要性を説いた。また、ＵＵＡ（ユニテリアン・ユニバーサリスト協会）のピーター・モラレス会長が祝辞を述べた。

式典の模様は衛星放送を通じて京都教会でも放映された。夜間にも式典が開催され、午前中参加できなかった仕事帰りの会員が参集した。

庭野光祥次代会長、近畿の青年に語る

～すべてが宝物　喜びを見つける教え～

2月26日、庭野光祥次代会長を大阪普門館に迎え、ご巡行式典が行われ、近畿支教区の各教会より婦人部員・青年部員・学生部員など約1,800人が集まった。式典は2階法座席で行われ、4～7階に分かれた青年部員・学生部員は、映像を通して式典に参加した。

はじめに、野上近畿支教区長からの挨拶、参加者を代表して4名の体験発表があり、続いて泉田青年本部長の挨拶があった。その後、庭野光祥次代会長の講和が行われた。次代会長は式典終了後、各階をまわり青年たちと記念撮影を行った。

次代会長は講和の中で、「人は生きていると、苦しいことや辛いことに出会う。そのときに『なぜ？』という気持ちが起きる。その部分を開祖さまは教えてくださっている。仏教というのは、一言でいうと（苦しみの中にあっても）“喜びを見つける”　教えです」と述べ、「佼成会に入ると、困ったことが宝物になる」と語った。

京都教会からはバス3台に分乗し、約180人が参加した。参加者からは「次代会長の講話がたいへん分かりやすく、印象的だった」との感想が上がっていた。

アットホームな支部を！　～亀岡支部より～

昨年の12月11日、亀岡支部法座所において「支部のつどい」が開催された。法座所を会員のホットステーションにしたいという願いから、各主任手作りの料理を持ち寄ってのつどいだった。

東日本大震災からちょうど9ヵ月後のこの日、震災の慰霊と復興祈願、そして日頃の感謝の気持ちを込めてのご供養の後、会員による大正琴の演奏や歌の披露、少年部員たちによる歌やキーボード独奏などが行われた。終始アットホームな雰囲気だったという。

また、亀岡支部は「かめおか宗教懇話会」に加入し、積極的に活動している。同懇話会は平成9年1月設立。神社神道、カトリック、大本、天理教、立正佼成会、伝統仏教などの宗教者が集い、相互理解と研鑽を深めている。

そして、世界平和を目的として、シンポジウムなどを開催している。

●お役を受ける（役とは成仏、益とは成仏）

（佼成会のことば）

「益とは成仏」という言葉がありますが、これは仏教を信仰する最大のご利益は成仏であることを意味しています。佼成会では「役とは成仏」ともいいます。お役を受けることが成仏の近道であることを表現したものです。

お役を受けると、「お役に立たなくては」「お役に立ちたい」という心――「まず人さま」という心が自然な形で起こってきます。いわば、菩薩の心になって菩薩行がスムーズにできる。そこに「お役を受ける」ことのありがたさがあり、成仏の姿があるのです。

ところが、私たち一人ひとりの機根はさまざまです。だから、佼成会ではだれもが菩薩行に入れるようにと、その人その人に合わせたお役を受けていただいています。つまり、みんなが無理なく菩薩行をすることで、成仏の世界に向かって歩んでいるのです。

今月の言葉　～利他行で整う～　京都教会長・佐藤益弘

昨年３月11日に東日本大震災が発生してから今月で１年が経ちます。あらためて数多くの犠牲者に心からご冥福を申し上げます。そして会長先生から頂いた年頭法話にありますように、お亡くなりになられた方々への慰霊・鎮魂の礼を忘れることなく尽くして参りたいとの誓いをもちつつ、支援活動に更なる協力をさせて頂きたいと存じます。

さて、今月は機関誌『佼成』において、会長先生から**「心の整理」**というご法話をいただきました。その中で、釈尊が最後に遺されたお言葉とされる遺教経に、「多欲の人は利を求むること多きがゆえに苦悩もまた多し」という一節が紹介されています。ここで私は、苦悩とその原因についての因果関係が分かりやすく説かれているものと受け取りました。つまり苦があり、その原因は多欲であると教えてくださっています。四諦の法門でいう苦諦（現実の苦しみ）、集諦（苦の原因）のところにあてはまります。その後に続くものとして「もし諸の苦悩を脱せむと欲すれば、まさに知足を観ずべし。知足の法は即ちこれ富楽安穏の処なり」という経文が紹介されています。ここでは、四諦の後半にあります滅諦（苦の滅した理想の状態）に至る道は、足ることを知る心に立ちかえること。即ち道諦（理想への手段方法）であると説かれていると受け止めました。

今、被災地では原発による被害を受けられ、長年住み慣れた郷土から離れて生活することを余儀なくされている人たちが大勢いらっしゃいます。ある方の話では、そうした状況は、第二次世界大戦中に疎開された方々が沢山いらした当時の日本における状況と同様であるともいわれています。そのことを思う時、「これだけで十分である。こんなに沢山あって勿体ない、有り難い」という心が自然とわきあがって参ります。また、自分の手元に余計に物があると、ここから何か被災地の方へお分けしたいという気持ちが芽生え、いっそう祈りを捧げつつ、被災地復興のための支援活動に協力させて頂きたいと強く思います。まさに会長法話の後にある**「利他の行ないを」**ということが加えて重要になるものと思います。そのところでは「問題が複雑に絡み合って解決の糸口が見つからないときや、大きな衝撃を受けたときも、私たちはなかなか心の整理がつきません…」とあります。しかし、「縁起の法」などの真理に照らしてみると苦から離れられ、気持ちが楽になると書かれてあります。やはり、**仏さまの教えにそって心の整理をつける**ことが大事なことと思います。

開祖さまが本会を創立した目的は、「人を救ってあげたい」ということでありました。その創立の精神を具体的な実践行として分かりやすく教えて頂いたのが、**「まず人さま」**ということであります。そのことを徹底して実践し、身につくほどまでに至ると生活が整って参ります。よって、穏やかな人になり、心の整理ができる人間にならせて頂けるものと信じます。混迷した今の時代こそ、利他の行いに心を向けて参ることが緊要であると思う次第です。

心身一如と教えていただいておりますが、目に見えるところでの整理、物の整理や身辺を片づけることをおろそかにせず、丁寧にさせていただくことを先ずは実践したいと思います。あわせて目に見えない心の整理は仏教真理に照らし合わせて、利他の行いを喜んでさせて頂くことで、自ずと叶うものと思います。今月も、私にできることを精一杯させていただきます。

都大路を疾走！　全国車いす駅伝ボランティア

２月19日、全国車いす駅伝競走大会が行われ、青年部員が前日の受け入れからボランティアスタッフとして大会を陰から支えた。前日の18日は宝ヶ池国際会館駐車場で全国から自家用車で移動されてきた選手の受け入れボランティアを行った。大会当日の19日は午前中西京極運動公園で選手の車いすの運搬を行い、午後から宝ヶ池国際会館駐車場に移動して選手の降車介助を行った。ボランティアに参加した青年は「直接選手の皆さんとふれあうこともでき、その明るさや前向きな姿勢にこちらがパワーをいただきました」と笑顔で語っていた。

アフリカへ毛布をおくる運動　スタートへ！

４月１日より、京都教会における「アフリカへ毛布をおくる運動」がスタートする。キャンペーン期間は５月31日までの２カ月間。

４月１日に開始式が予定されており、この日より同運動の精神、仕組みへの理解や各地域での取り組みを促すことにしている。そしてキャンペーン期間中、活動を通じての喜びを確認し、それがまわりに伝播していくことを目指している。

同運動の実行委員会では幅広く一般市民にも協力の輪が広がることも期待しており、「毛布の提供」「海外輸送協力金（毛布１枚につき1000円）の提供」「同運動の目的や願いを伝えること」などの協力・支援を求めている。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

≪アフリカへ毛布をおくる運動≫

ナイロビ会議の成果の一つとして「ＷＣＲＰ宗教間プロジェクト」が新たな事業として誕生した。その活動の一環として、アフリカ内の難民と干ばつ被害者を救済するプロジェクトがスタートし、40 万ドルの予算が計上された。日本委員会はその半分にあたる 20 万ドルの拠出を約束した。

全世界から宗教指導者がアフリカに集まり、貧困と飢えに苦しむ人たちを目の前に見、その訴えを自分の耳で聞いて、あらためて「病院も必要だ。井戸も掘らなければならない。様々な分野の専門家の知恵も借りなければならない」と、その緊急さを痛感させられ、何よりもまずその資金を作らなければならない、と思い知ったのである。

「まず、日本がそれを負担させてもらおう」と決意して提案し、このプロジェクトが実現したのであった。それは、かつてのボートピープルの救援活動とまったく同一の行動だった。**宗教者の実践は、最初はささやかなものに見えても、それが、やがて心ある多くの人々の共感を得て大きな運動に育っていく。大事なのは、人々が手をつけたがらない困難な仕事に、勇気をもって取り組むこと、そして最初の一歩を踏み出すことだ。**

ルーベンでの第 2 回会議のあと、日本委員会が始めた「一食(いちじき)運動」も、各教団で続けられ、立正佼成会では、この一食献金と青年たちが中心になった街頭でのユニセフ募金とを合わせて、これまでに 120 億円という金額を途上国に援助している。一食平和基金だけでも 1 年に 10 数ヶ国、50 プロジェクトへの援助が行われているのである。

この一食運動でいちばん大事なのは、清貧な生活の大切さはもちろんのこと、飽食ぎみの日本にあって自分たちの一食を抜くことで、発展途上国の人たちの苦しみを自分の痛みとし、その人たちのために少しでも役に立てる自分になりたいという願いを持つことであろう。このナイロビ会議が幕を閉じた 3 ヵ月後、私たち立正佼成会では、会をあげて「アフリカへ毛布をおくる運動」に取り組んだ。

エチオピア北部の干ばつが東部から南部にまで広がり、「すでに 50 万人が餓死か」と報じられて、緊急援助の食料が世界の各地から首都アディスアベバに空輸され始めた。しかし、飢餓地帯から着の身着のままで逃れてくる被災者たちは、夜間の温度が 5 度にまで下がる冷え込みの中で、600 万人もの人たちが危機にさらされているという。そのうちの 100 万人は、いたいけな子供たちなのである。

12 月の初め、ユニセフのジェームス・グラント事務総長が緊急アピールを行ってその現実を訴え、緊急援助を求めた。とりあえず 200 万枚の毛布が必要で、その半分の 100 万枚を日本で集めてほしいという。それに答えて、外務省と日本赤十字社、日本国際ボランティアセンターなど民間 4 団体で組織された「アフリカ飢餓救済のための連絡委員会」が活動を開始した。立正佼成会もこれに加わり、全国から 175 万枚の毛布を集めてアフリカの被災地へ送った。

「黄金の椅子に座った貧乏人」という言葉がある。豊富な地下資源を持ちながら、それを知らずに暮らしているアフリカの人たちという意味だろう。いや、地下資源があることを知ってはいるけれども、技術力が足りないために収奪されているアフリカの人たち、という意味もあるのかも知れない。**ひるがえって、私たちはどうであろうか。私たちは、さらに悪いことに心の貧困におちいって物を奪い合い、分かち合うことを忘れているのではないだろうか。アフリカへ毛布をおくる運動を通して、静かに整然と並んで毛布を受取るアフリカの人たちの姿に逆に教えられ、忸怩(じくじ)たる思いにかられるのである。**

≪昭和から平成へ≫

昭和 64 年 1 月 7 日、テレビのニュースが天皇陛下のご容態の悪化を報じた。陛下のおからだの具合が良くないことは、前年の秋から伝えられていた。9 月の半ばに、発熱のため静養されていた陛下のご容態が急変して「天皇ご重体」の報が内外に衝撃を与え、陛下の平癒を祈る市民が、皇居前につめかけた。

しかし、陛下はそれから何度かの危機を乗り越えてきておられた。それが前年暮れに、かなり危険な状態におちいられたと報じられ、国民は毎日公表される容態に一喜一憂していた。そして年が明けて正月の松がとれる 1 月 7 日、陛下は皇居の吹上御所で 87 歳 8 ヶ月のご生涯を閉じられたのであった。庭野開祖は、教団幹部を集めて 6 日間の喪に服すことを決めた。（つづく）

渉外部からのメッセージ

あの大震災からもう 1 年が経ちます。地球にとっては小さなくしゃみのようですが、その甚大なエネルギーに私たちはなすすべもなく、自然の前で無力さを実感しました。日本のように先進国でこれだけ地震が多い国は世界的にも稀です。それだけに国民が自然に対する畏敬の念を抱き、そして協力し合って生きているのだと思います。世界から見れば日本人の忍耐力とチームワークの良さは驚きのようですが、幼少の頃から自然と身に付いたものかも知れません。これからも益々被災地支援のチームワークが必要です。

この月報はホームページでもご覧頂けます。
アドレスは http://rkk-kinki.blog.ocn.ne.jp/kyoto/